

昭
226
卷 1



あつてゐたよりの人鶏の舎曉
鐘成今年の夕月白月のも
おのゝんたの年と狭貫を
象頭山とまうりよの月乃
未かちのあつりよの
名くか海とあつりよの
んか神廟仏室の

碧水藏書

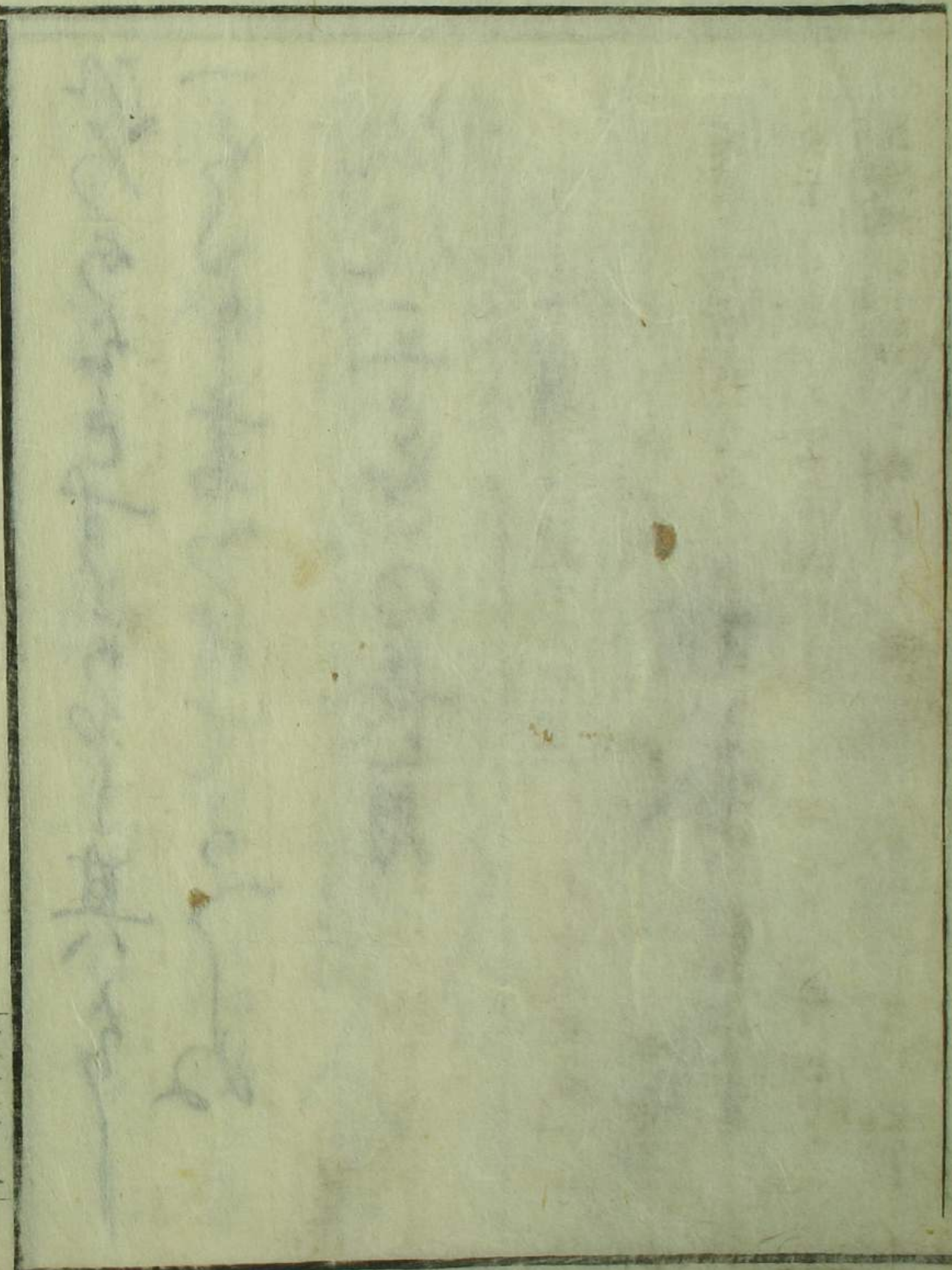
書ふもゆるり請らぬらん
道の繁はるるに花をよめる
もこゆまへに花をよめる
おとらぬる花をよめる
ふらぬる花をよめる
みらぬる花をよめる
けらぬる花をよめる

金一序三

弘化二年の長月
はらあらしすいあら其ら
くかり書りけりぬ

植松修理權太夫源雅恭朝臣

雅恭



凡例

- 一 此書二國一覽の名勝志の類いにあつては象頭山泰詣の路径と專と
一 并其便宜に隨い巡覽とて名所と著しめりあり
- 一 寺社舊跡大概次第小記一巡覽の心と以て著しつゝも旅客往
返の勝手とて道條の前後に齟齬一行程の損失又無くも
一 つゞ強ち巡覽の規矩とすべし
- 一 此の古跡彼の廢趾おと漏脱とる所あるは是ハ魚來斯る冊子にせん
とて紀せしにいつて去る夏六月象頭山に詣て一砌之聞及びト
遍禮の靈場或ハ名小高き神社おと此彼と巡拜一家土産とて
書止りし書坊の需りに固辭とて粗綴りて出故いり
- 一 其境地と妄失して靡氣うるハ圖と出さば且冬暑の苦執り方と

碑文の寫し得ざるは則ち雲井の御所の碑太夫黒の碑花立の碑
 寶藏一覽の記靈驗石木の類いなり是れは再回彼土に渡海一木
 く寫しと拾遺の篇に詳しふとす

一 摸寫密もびりて上木がた物もびりて差むれ再寫しと拾遺の
 篇に如ふ是れ白峯山勅額門の隨身判官為義八郎為朝の像水
 笠の岡の西行法師の像一夜庵の山寄宗鑑の像の類いなり
 一 圓龜の津に渡るハ多クハ結人浪華より船より下向もびり
 先船中より眺望の名所と粗出せりむ攝播の海邊ハ先板に詳
 むれば是と省に備前の海濱より著いなり
 一 陸路下向の道條ハ續々と後篇に著し尚海邊の涌脱せりとも
 是に加ふ備前兎嶋の北濱西大寺大なるの泊木の類いなり

金毘羅参詣名所圖會卷之一

目錄

浪華川吊帆圖	虫明の廻門	長鳴 尻嶋	尻海
牛窓の湊	名産鳥賊指螺	前嶋 小嶋	明神牛と倒れ圖
大島	大石明神	大島の廻門	樞野の濱
出崎 小串の浦	胸上の浦	山田田井宇野	直嶋
新院左遷の圖	琴の鼻	帆うけ石	重石
鏡岩大師堂	琴麻の濱	日比の浦	日比の塩濱
雄の途	経巻と海産小流む圖	波川	浦田の濱
笠童螺と拾遺圖	引綱の浦	大師の清水	引綱の天神
唐琴の浦	唐琴の泊	捨場島	田の口の浦

名産真田織居の圖

下村の浦

嶋の八幡宮

西行乾蛤廻り祿の圖

児嶋

名産糠蝦

瑜伽山一ノ鳥居

兒ヶ池

化粧坂化粧石

二ノ鳥居

登道下旅駕屋の圖 二王門

瑜伽大権現御本社

幣殿未社

観音堂

御影堂

金堂

多寶塔

護摩堂

鐘樓繪馬堂

蛭子石大黒石

地藏堂

奥院妙見祠

龍王社

経の尾

鬼墳

蓮臺寺本坊

御守護續所

神馬堂

燈籠堂

通夜堂

茶堂

乘蔵院

寂勝院

紫銅鳥居

石川成一の碑

小川橋本

味野赤崎

釜ヶ嶋の古城

官軍絶交合戦の圖

田之浦

天満宮

吹上の濱

新庄八幡宮

下津井の浦

牛頭天皇の社

扇峠

讚陽眺望の圖

祇園御旅所

本庄八幡宮

名産鱒

大島

真那邊

漁夫妻魚で齋の圖

以上備前の海邊

塩飽七島の圖

本嶋

向登嶋 荻ヶ嶋

辨天島

長嶋馬ヶ嶋

廣島

手島 小手島

佐押島

小嶋下二面島

高見嶋

齒節岩

牛島

沙弥島

瀬居嶋

小瀬居島

與島

小與島

寶来嶋

鍋島二面島

羽佐島 不登嶋

岩黒嶋

櫃石島



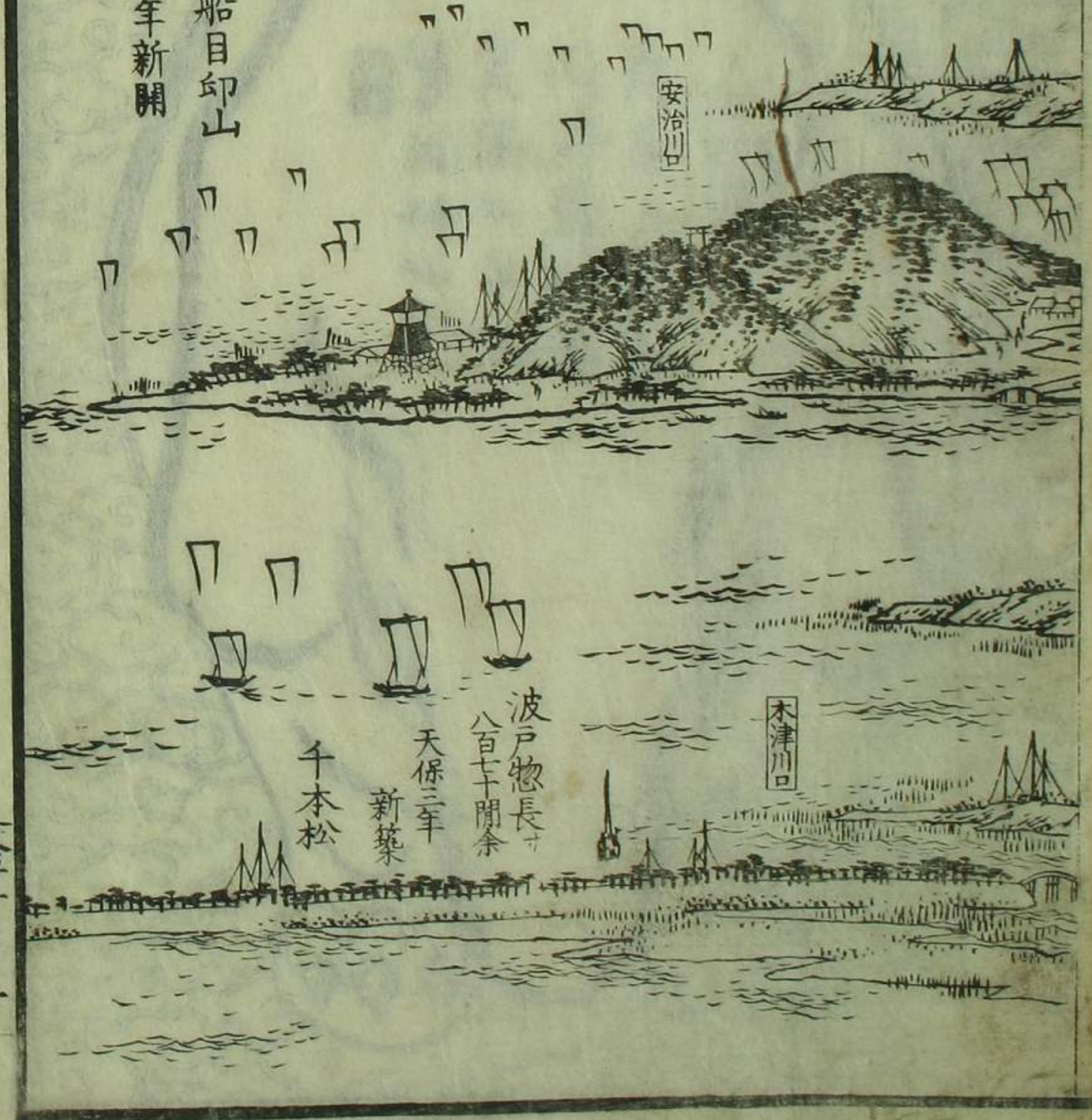
何事も成さず
 ともれむ
 おあゆみ
 山も人共
 唯う出る
 道春

萬葉集
 難波方水手
 出船之遙遙
 別來禮杼忘
 金津毛



浪華
 西川口之國

天保三年新開
 迴船目印山



金一ノ一

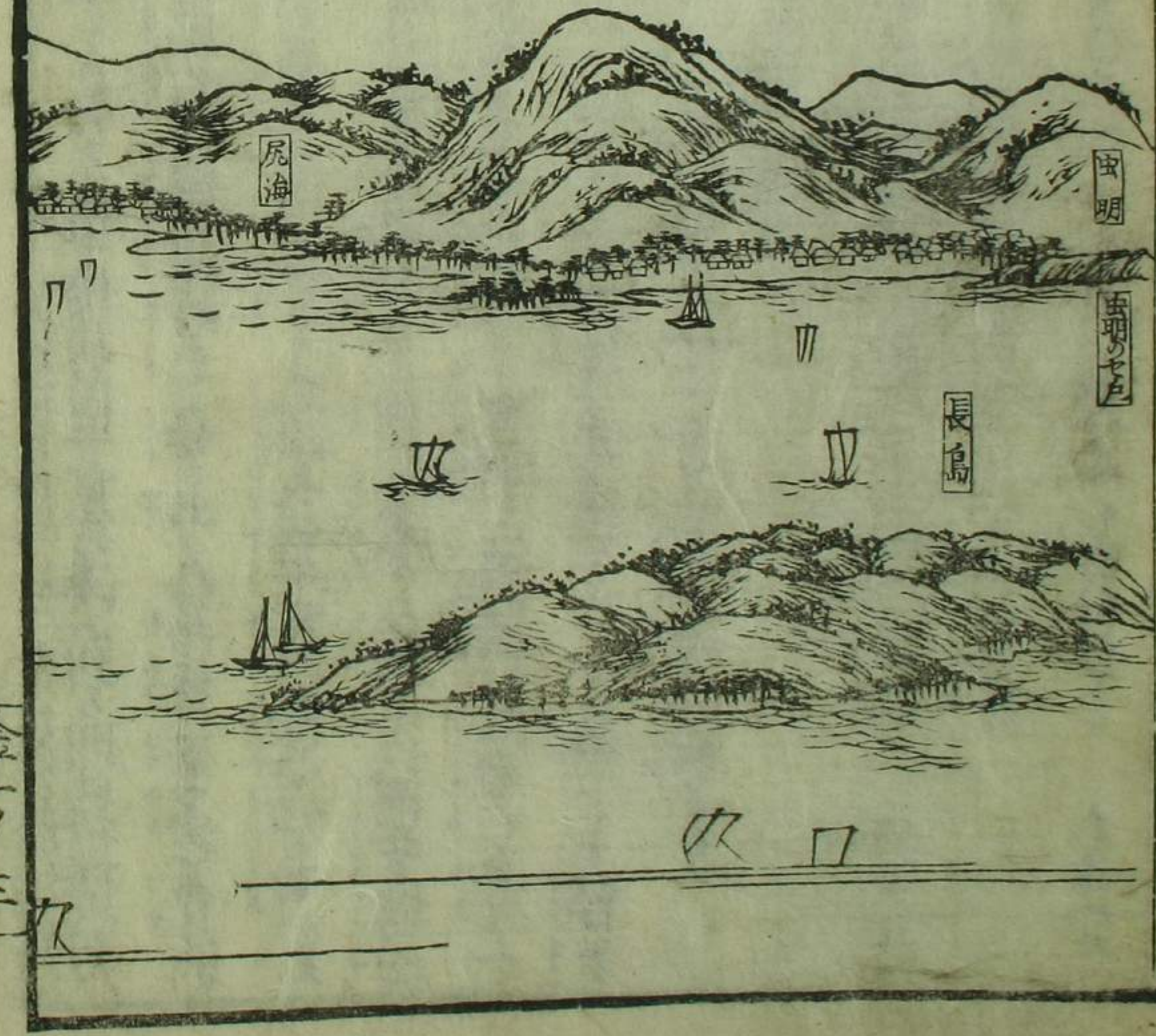
萬葉集
 大船爾真槌繫
 貫水手出去之
 奥將源潮者于
 去友

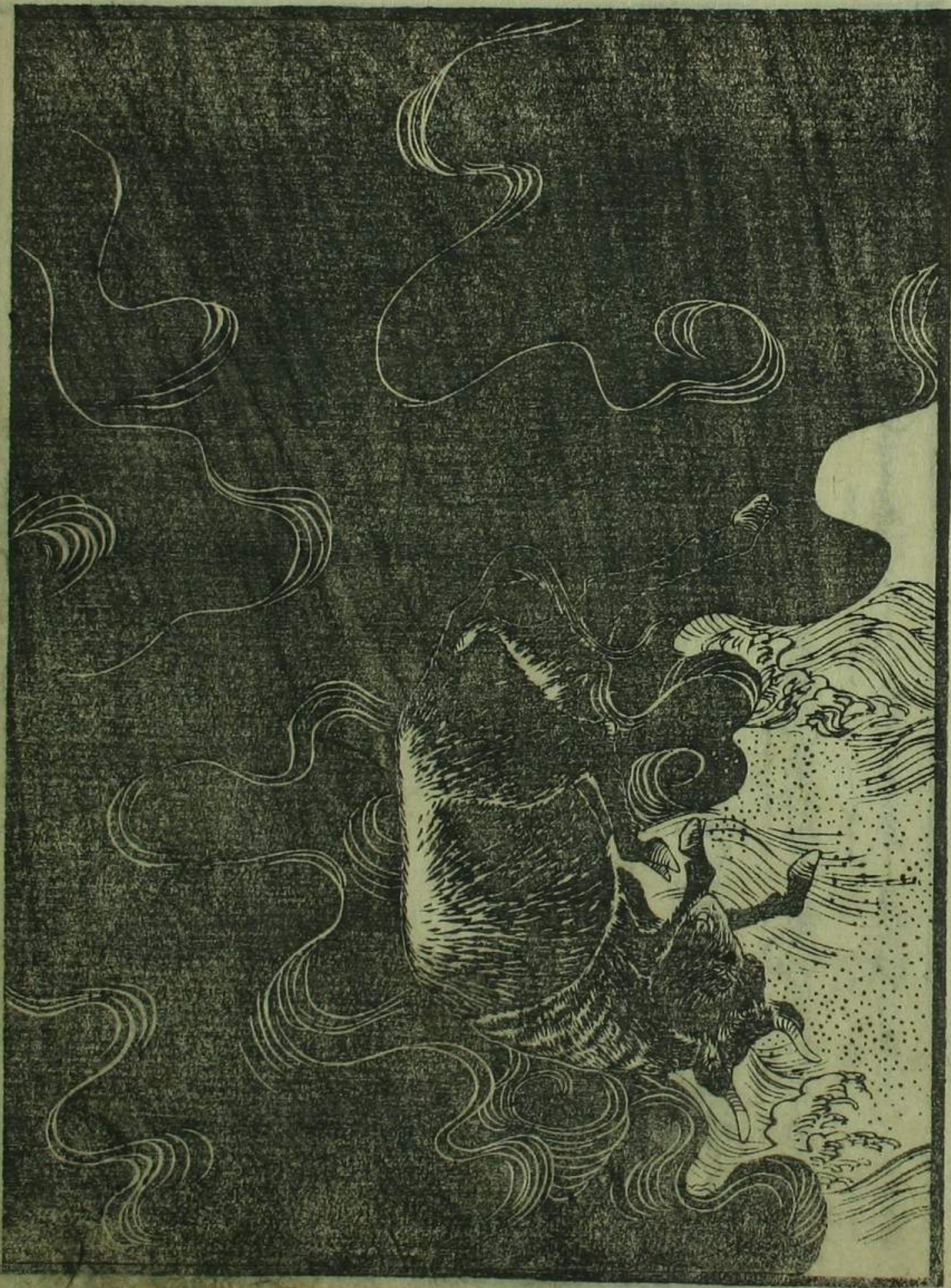
酒造くあろね
 久るめよのり
 夫と遠くよ
 舟出くく
 後泊系院



新千載集
 風あつれ虫のの
 やの夕まよ
 友平かよ
 夜半の
 舟人
 後泊系院
 沖製

虫明の廻門
 長嶋
 尾海
 岸島
 半窓の
 八幡宮





井上通女飯家日記云 廿九日の夜あけてふんき半窓しり

世と流るる牛窓のゆれ漕舟船は上りてやん 通女

名産鳥賊 當浦の沖あり他一超て遠く多き最も味い美なり

同指甲螺 同海濱より他一掃うりて之指甲螺は横にも長く長凡七八分計

前島 半窓の前より内海ありて半窓より船をい出せり

小島 前島の西に並びて二島あり儼一島の小島なり

犬島 半窓の湊より二里計押の方沖より相連りて二島あり一島久家此面

彼方亦有農業をまじり一島は巖石と横重なりて更人往べ

地より山頂の絶頂に犬の形に似る巨巖あり此を犬石と号し明神と稱し

舟より舟と連りて是を巖の太く圍凡五丈計なり希代の畧なり里俗の曰

西國の巨部は大神と号せる者ありて人と船と事多し是も船める者ありて来て

此石と拜されぬ退るて映とありて能く又此畜しころ乃大
其性何〜〜〜主是と号する時此島と連來て放て直其性長
あま〜〜〜山の半腹に小社ありて住吉春日菅神木のと社を祭る
則ち此島は生まつべし

此石往昔此地に彌師ありて其家畜しころ乃大希代〜〜〜痛と獲る更
雙りぬ籠籠〜〜〜夜も床を因り臥し〜〜〜に彌師死して後此山
中へ死〜〜〜

犬狗養畜傳

周禮六畜註獸可畜者六豕牛馬羊犬豕鶏と有り論語の古注も
犬は守禦と有りて人々養ふ〜〜〜又凡俗通曰俗説小物は實主と別て
守禦と故小四門小着て以て盜賊と避く〜〜〜續高僧傳に犬と防畜と
云ひ楞嚴釋要鈔に小物と名て守物と云ふ〜〜〜兼好が徒然草に犬守防
〜〜〜勝〜〜〜實名犬能息と智と仇と剛い鼻利〜〜〜

犬鳴

大石山の絶頂にあり
石の長湯にて柱の石
石の裏に法にて北大の
傍に兎狗の形を石に
母をよきとてにけり

腥と風と

保ととん

柱



金一ノ八

大石山

純友釜ヶ嶋の城
楯籠り合戦の時
純素は通し有て
合國とて一兵船
二十余艘漕來り此
大嶋の瀬戸とて
塞ぎ鉢波と作て攻り
純友はちとて好官
軍をよきとてにけり

犬石



純氣とて能家と守て此事の人内へ戸嚴く吐竊盜と防ぐ官家職感畜
ごん有る者也且田大狩備の時より山坪小牧ちて禽獸の所在とかがりも乃
官家の宴獸より京来一切の邪魅妖術を祓ひ避るが故に道家は是を林示す
とつら凡大の忠切人へ勝れ其兼る主の息と知り是と被むるは姓なり
和漢も小其例少くはる 尚大の統持し有るものも其類は里々

樞野 又柏野も 牛窓より一里北あり埴漢のりく多く埴と製は

出崎 米崎小串胸上 此れも兎島の海邊あり 山田 埴漢のり

田井 宇野 田那より一里北あり此邊埴漢あり

直嶋 田井の浦の南あり此れも

保元物語とて去程新院八月十日御下着の由國より清清文到來此は松
との新津屋のりく國司院小直嶋との所御所と作し出されは美小
後せむか下 白峯僧住子云云大なる化る新院院は後國司京那

八輪嶋今の高松 着せ給ふ在廳二木の何某嚴く言くと陸上奉るは
是は後て據る直嶋御船とせさせられ此は泊らせ給折しも其夜
月さるるは 寔に鄙人の心さめて都さるるは月影のい愛らんと
御嘆けの中も御心慰れ給ひ終夜御寝と彈給いり今尚其子跡存
せり其後松山の津小着せ給ひ國司の中御所と造り出さるれば
在廳野大夫高遠を造り松山の宇の堂今今のせり則此所は在は
之奉是は林田の雲井の御所と社は今尚其跡あり其地は
琴の鼻 直島の嶋とて今新院あり御船とせさせられ終に陸上は
帆懸石 今あやまつて終の候終の浦あり
重石 今麻村屋道村のりくこの破辺あり巨巖ユーンと重きもむ人力の業あり
日比の浦 兎島の出所より海上凡二里針波戸と築きそねがりの便とせり



山崎
 舟と那は
 西乃
 舟と那は
 西乃



直嶋琴の鼻

保元のはら新院
 左遷の舟かゝるを
 怪い直島の破れを
 強し舟を成すを

金一ノ十



西行法師浦田の濱にて普賢菩薩拾遺
 又て奇しくもひびくもみまはるる

引網濱

浦田より一里計西より引網村の海辺といふ

大師堂

漢迎い小堂ありて弘法大師と安んばる當年當兎嶋郡四国八十八ヶ所の靈跡
 大師堂の傍より海にかけぬく井水の霊水といふ

大師の清水

大師堂の傍より海にかけぬく井水の霊水といふ

引網天神

引網村の山の半腹より當村の生土神といふ
 天神の社のうらやまあり其事跡詳らむべ

八房の梅

同ト傍より小堂あり彌陀佛と安んばる土人の白髪翁生昔海中より網をかりて
 引網の浦の最より此迎まて糸を引

阿彌陀堂

同ト傍より小堂あり彌陀佛と安んばる土人の白髪翁生昔海中より網をかりて
 引網の浦の最より此迎まて糸を引

楯場島

引網の浦の最より此迎まて糸を引

唐琴浦

引網の浦の最より此迎まて糸を引

都

都までいざ通る唐琴の波のよすがて風ぞ吹く

足

足のねは風のかきいては浪やむらん唐琴の浦

波

波の音は冬を告げたる唐琴の浦



鏡岩大師堂

巨巖の間小堂を建る

まろくそや
乃のくそ母の
枝より

えんち
小島乃
定家

田井

大師堂

三丁



田井浦

大師堂

慈照庵

牛頭天王社

島村の生玉神社

六月十日

生玉

舟をくぐり
雪ふきかす
夜みち

南橋

大師堂

金一ノ十四

田井浦



あしげや
 子音
 波は
 三ヶ
 牛の毛

双



重石

尋麻村於道村の
 間の後辺より
 巨巖重と云を
 云々
 此辺より沖の方遙
 小帆の石見ゆる
 恰も帆と云けり
 云々の
 重石の窪ら山の
 形勢細いもの
 云々の
 都て此溪通りハ
 推量の地云

金一ノ十五

双
 双
 双
 双



遠くは
 船も
 波乃よ
 り
 あれや
 前大
 橋也



日比
 浦
 塩
 推
 大
 計

金一ノ十六

推ノ途



淡川
浦田ノ濱

松原
風光

一丁の

色も

あれや

いその松

花は海を

美乃

うら

道通院

浦田

淡川

金一ノ十七



楯場島

引細の向

引細の天神

山の半腹小あり

青嵐ねも

無り

八歩



田口浦

児嶋郡南濱の通船着居の使のたて敷十間の石塘と海

此浦、中國西國往返の通船風波と浪と泊り且瑜伽山の麓なる夜に
糸消の諸人々一着岸一且金毘羅泰詣の旅客圓龜一渡る船場つらゆ
濱方小船而建別と瑜伽山泰詣の道條小此地の名産とて左乃家
毎木綿糸の組紐打紐種々此色色うろろく太きいろ細ねり又ま
田織二重夏帯袋織袖掛上括ふむと糸糸と紐と縞と色所せ
中て不並ごと旅人進む尚小倉織の帯地と織出さる何きも奇蓆に
して家を在る能ふられ求む人多し故に主つて小倉に船着あり
是より瑜伽山小森詣の行程山路二十余町所小町石りり
下村の浦十八町横州丸龜一渡る海上凡六里余乗合の船、晩方より出
帆して東雲の山向地に着る借切船は豆敷と稱せし其客の意不應に



大鹿ヶ
重径

行くすむ
らん

そ乃

美しや

浦さや

烟はよの

りふや

新様古今

瑜伽山

田ノ口

ガ山

庵ハマ



田ノ浦

舟着

中江
瑜伽山

世余丁

経後松送

河中人の袖

月こり

海村

舟はむ

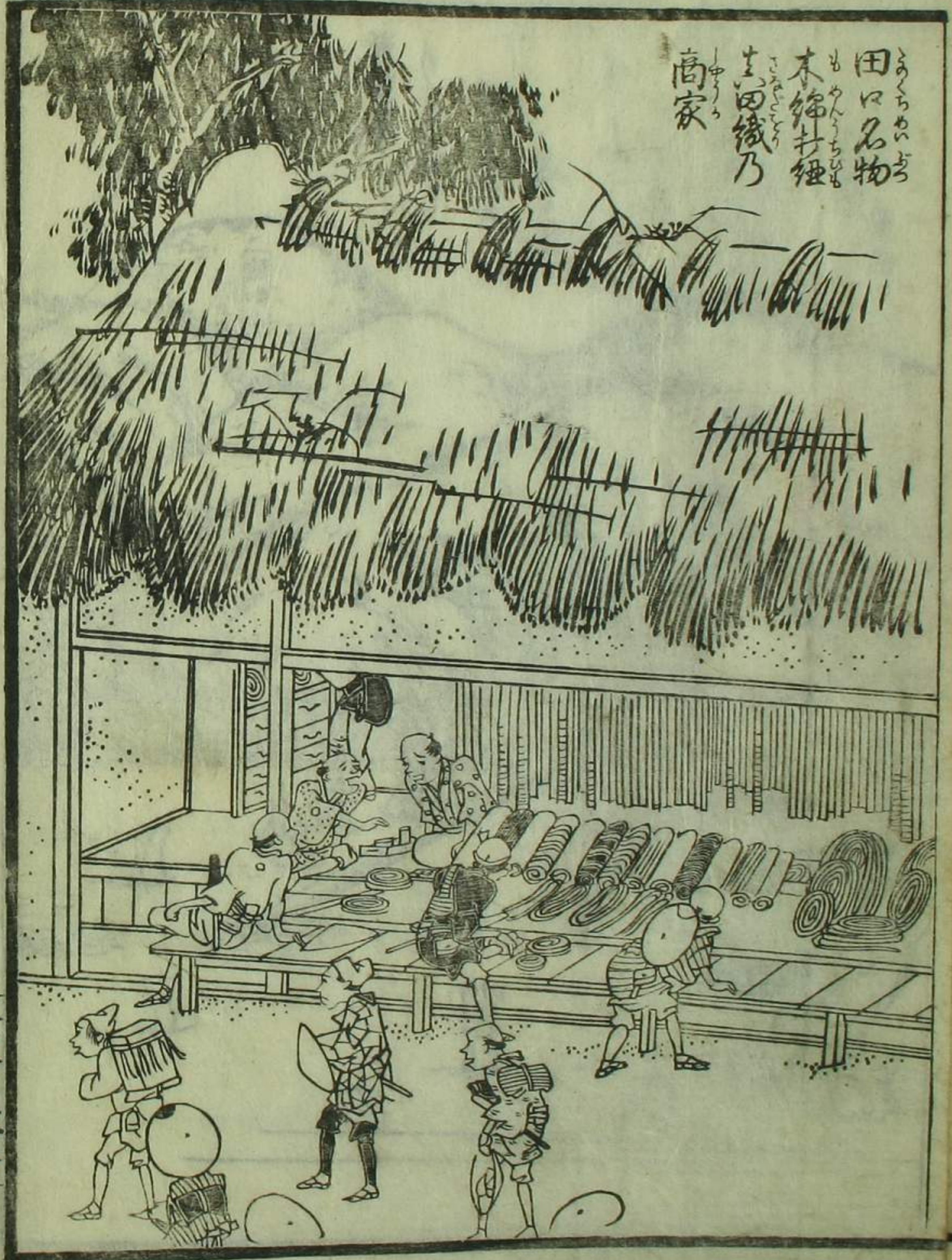
美の

風

お大納
室房

金一ノ九廿二

田口名物
木綿掛紙
生田織乃
商家



金一ノ五二

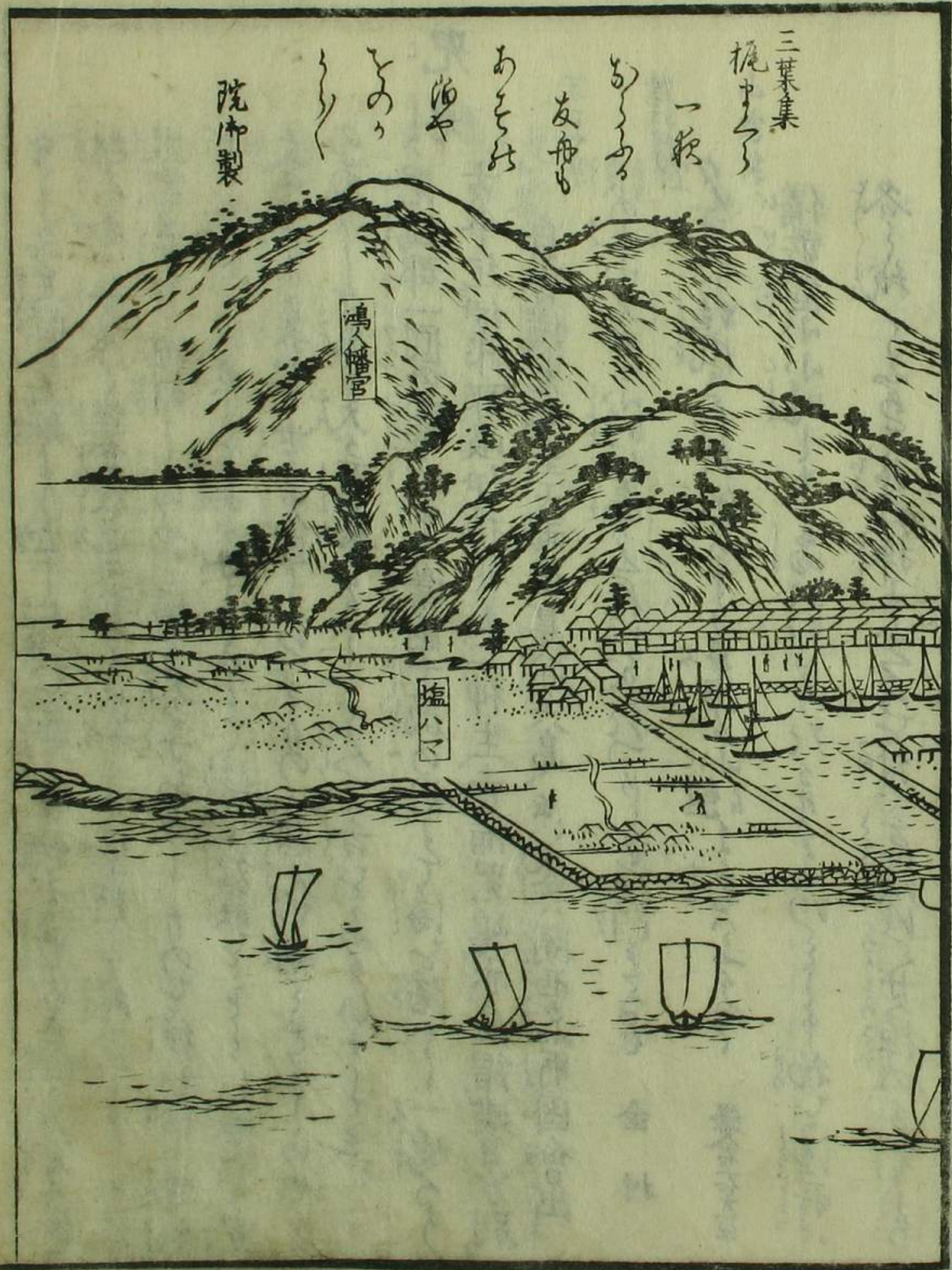
下村の浦

田の浦より十丁をうろ西にあり其道條塩濱より

此地も田口小舟一々通船の便宜此浦一々む榎伽山乃繁なるゆへ
 糸浦の旅客あつて着岸一登山するもの多し行程此よりも二十餘丁
 まで田口にかじり幸う何れも其便に珍小圓龜小波さし海上凡三里
 針通船夜毎不出帆とるも濤路と往來は金毘羅詣國邊路の旅人其
 余高客あり農夫あり夕夕舟乗船とるもの朝小着あり何時もに同形
 かく至て娘一れ船とるもの破さる塩濱して敷丁は間屋の烟之幕とる
 新善國は
 大村因幡守辰備の浦を船と通る終末向の方よりや雲二む
 三来り其中にて鳴呼かややと呼ぶこのりるを怪しく思ひ
 程一船の上の同遊く来る雲の中より足のさるりし道徒の者飛つたて
 てもるは是とては鏡のたるとある不審と思ふ所浦里小人多く三發

鳩八幡宮

下村町の西の方山の上あり此所は主神と此山上より海上の船と船来り



三葉集
 概す
 一航
 友舟
 あそび
 海
 山
 院佛製

鴻ノ権官

塩



下村浦船着
 瑜伽山小至る
 行社 凡二十余町
 下津井江 二里
 渡海丸亀江
 渡海の船路
 凡六里余
 濱辺小
 金毘羅瑜伽
 木の両神の
 鳥居あり

塩濱

金一ノ元三

山家集
 申小くくくくくくく
 あひるくくくくくくく
 くひりれバ拾捌と靴
 くゆるあうくくく
 けくは閉て

おれくくくくく
 刺く靴もくくく
 くはくくくくく
 くもくくくくく

西行



金一ノ五

瑜伽山蓮臺寺慈聖院

児嶋郡一ツ田日浦下村浦おんや。行徑もふ千金丁

本社瑜伽大権現

本地 阿彌陀如来

幣殿 前本地佛二尊 右小間

末社 本地彌勒菩薩 同 辨財天女 同

本堂 本尊十二面觀世音菩薩

御影堂 弘法大師

多寶塔 本尊五智如来

護摩堂 本尊不動明王 服士

鐘樓

蛭子石 大黒石

本殿小安置り共一行基菩薩の作秘佛あり

右小間

三寶荒神 同 四天王

服士二天

金堂

御影堂の上の段の地はくき係傳教大師の作

繪馬堂 本社向ふにあり奉獻の名画木馬あり

繪馬堂

地藏堂

本堂の向ふにあり奉獻の名画木馬あり



奥院妙見祠 妙見塔の上より北に向昔は南向なりしに神矣新しき通に横の時
 龍王社 妙見塔よりおしよ

經の尾 東の山の平腹わたり行基菩薩大般若六百巻を
 書寫し埋り給ふ所より經尾山の名に起る

鬼墳 經の尾の傍より鬼の首と細器の埋りし所より世に瑜伽の鬼塚とせしむる
 方丈客殿 本社の方より一湖水間二八仙間三孔雀間四大床間

五柳間六群仙間 何れも結構美麗あり林泉は自然の山岳より
 巨嶽祖ら樹木般々茂りて景色言語絶は

持佛堂本尊愛深明王並不動明王石像の弘法大師 何れも増呼僧正の作
 黄金釈迦牟尼佛 長二寸五歩當山の南の傍より涌出し給ふ所あり

地藏菩薩 阿弥陀如来 兩尊とも小恵心僧都の作皆とも持佛堂より安ん
 御守護壇所 本坊の前より諸人 御礼とくつて受る 神馬堂 御守所の下より神馬二匹とせしむる

金一ノ世七

九本檜
 九本檜
 九本檜





山門 執金剛神の二王と安行行基菩薩の作 銅鳥居 二王門よりく

茶堂 山門の傍より諸人よく憩ふ

乘藏院 寂勝院 山門の西あり 其餘寺役家奉て扱ふ

往昔本社の山上五重の大塔并堂舎是より本堂の後の方金

堂是に續して惠堂經藏番神社燈籠堂通夜堂大門も魏

其後年廢して關る所より故に近曾同觀し復せんまを催

其建營最中より 神力靈驗の揚焉ハ言とも中く愚く筆紙

乃及所よりいへんが遠近の國より山川の勞むは暑寒此

時と嫌は歩くと運ぶと夥し是より二王門登道の下より一

鳥居より數町の間に右様駕屋軒とあり其餘緒高家諸職店あり

も木綿の打紐類真田紐小倉織ありと醫南家より諸人よく土産を需む

當山縁起

柳當山八人皇四十五代聖武天皇の勅願依て行基菩薩の開基其始天平年中菩薩大僧正轉任して朝恩と報ト奉らんが爲天下泰平の御祈願と修まると一字と建立せんとて自ら遍く雲水遊歴して宿福有縁の境地と探ひ給ひつ 竟一兎嶋小渡を來て此山の茅屋一宿り給ひる夜に夢に神人來りて告て宣く我は神世の昔く此山中の主なる産授知命之僧正此及王法守護の靈場と造るやんとの大願と起し給ふ志殊勝なり我任む山の無雙の清境ならん早く來て梵境を開と云密瑜伽行を修し給ふ國家安全類いあつむ又我と即ち瑜伽大権現と號して齋に祭り給ふ後長久の密擁護の善神ありて利益と施人努く類い給言ふられ宣く見打され此其曉鐘遠く聞て月頃を曙るる僧正信心肝銘し

やどて山々小分て此方彼方と尋ひ給ふ此山の辺り殊更無垢清淨此靈地と見て山高くと二匹の白雲峰と透り谷深くと萬仞の青巖苔滑らるる空んくと傑出せる山勢の竜の臥る如く虎の踞るに似て奇木鬱々として枝と交り靈草芬々として花と開く月出て無明の闇と照し雨濺で煩悩氷と滅み岩も清氷冷ふ流出て五塵の垢と洗ふに吹風長く響くこと六欲の夢と破つて羊腸の徑路を経て人家と隔るること二十余町南北に更小海に連るる萬里一望水天一色の景色絨小有るは所ありは神純の地とありしと思ふ合て大般若經三軸と書寫して是と埋め其所を經之尾と名づけ一寺と造りて即ち經尾山瑜伽寺摩尼珠院と号し破神の教に如く瑜伽大権現の御社と建て有來瑜伽相應して慈悲此二徳を以て其時々阿弥陀藥師の二体此本地佛と自ら彫作て安置奉

了佛は王法の守護神と崇り向に密瑜伽の行業を修し國土安穩の祈願を
念ひ給はるる時此山の西の方より夜より怪しき光りは立ちて御覽下
給ひつるる故りやとて見行のくく一株の香木ありは是とて伐て又よづ
ら十二面の觀世音菩薩の尊像を彫刻し本尊とて作らるる即ち今本
尊是より斯る尊の精舎ありは延曆廿頃より阿黑羅王と号する夫婦
二兒の悪鬼何方もあつて來り住て寺内の僧俗を追出近里の人民に傷害
する事敷くまて久く大に恐怖と種々防禦せられも猛勢自在の變化に
りれば如何も爲さず京都(新)より帝聞しる驚き給ひ急ぎ
誅伐せらるる上田村磨と將軍とて許すの官軍とさしけ給ふ田村
磨此嶋へ渡り來つてかたどく攻給ひし霧と翔り霞も消る妖怪
もれ輒く討取給まらる難く大に驚き給ひて瑜伽大権現に奉幣

して丹祇と申す故に度悪鬼退治の勅令を奉り送す此嶋を下向に
しつとも元來不測の妖物とて人々敵をばおつて甚上清浄の神
窟に於て妖魔住ん其具神威の如く似る作を頼み此二つの靈験を
顯して我威力を如くと懸祈願を凝給ひしに靈験多し現れて彼妖鬼
がその中小鬼心を翻して將軍に隨ひ奉り攻む謀りありと示し奉られ
田村磨大悦び給ひやと彼鬼兒を其内にて數千の軍兵とすめ直禁
誅戮給ふ時波河羅王も幼神威を摧れて心の如く働け得ぬと首を
失ひしるこれ此度勝利の畢竟鬼兒の心を改め軍を導かざる故にこれ此
嶋と鬼島と名付らるる又其鬼も人々を怖るるを義女と名乗
りて紅粉を粧ひし所を狹い所とて鬼兒が地を縫合するといふ今も
ア斯て田村將軍の神靈の験ありと生靈の餘り荒果る堂塔悉く修理

妙給の諸又彼鬼兒軍歌歌とらひりたあ後親と殺ひの罪と思ふや自ら
共々死せり由村將軍志く是とらひれ給ひ準おの支骨と山中連給
世小瑜伽の鬼墳と是あり其後不思倭もる彼鬼靈七十五の白狐と現
して殘善靈毒の心と翻大権現の使隸とあつて佛法守護の善神とあり
衆生の患難を免せしむ其後源平の挑戦の初より兵亂打つたん弘建の
大乱より世は静謐の期ふく諸寺諸社を類廢せり須當山も殆衰微
不及んせり父皇百十代後小和院御在位の頃増叶僧正と尊以大徳
りる當寺に授任給ひて威るん手は燈と挑起絶るん手は法脉と継給
いふまゝ連綿と相續して今に至り又近々天和年中に故有る古来より乃
辨改り瑜伽山蓮臺寺慈聖院との瑜伽と則ち慈徳相應の徳と以て名
づけ蓮臺と妙法の心蓮臺とのあろる慈聖と彼行基菩薩の半づり蓮

給くる大慈聖像の御座と肝とつ意あり其余龍王社辰巳乃
方に鎮給ひ妙見宮、丑寅の方遙く高山の嶺よりゆるり護摩
堂御影堂持佛堂支寶塔三門未社の垂跡といへるまで悉く
由緒あまもみれと畧し其大概と記しよらん
靈佛靈寶御震翰の類諸家御寄附物和漢の古書畫珍器奇物本数
百有とゞも支繁くと記し能は畧之
靈方拜見 例年御祭禮 正月廿三日 六月廿二日 九月廿二日 十月廿二日
と許さる 御修法執行あり 泰清群集 二月 初十日 稻荷社の祭禮あり
一鳥居 田の口より町の合 二鳥居 町の中間あり大門再建の地八則
兒が池 一の鳥居の東の方より
化粧坂 化粧岩 妖怪の變化する所といふ一の鳥居より三丁計上あり

石川善左衛門成一墓 藏堂の傍地
石高凡五尺方一尺七寸計
臺高一尺方三尺計

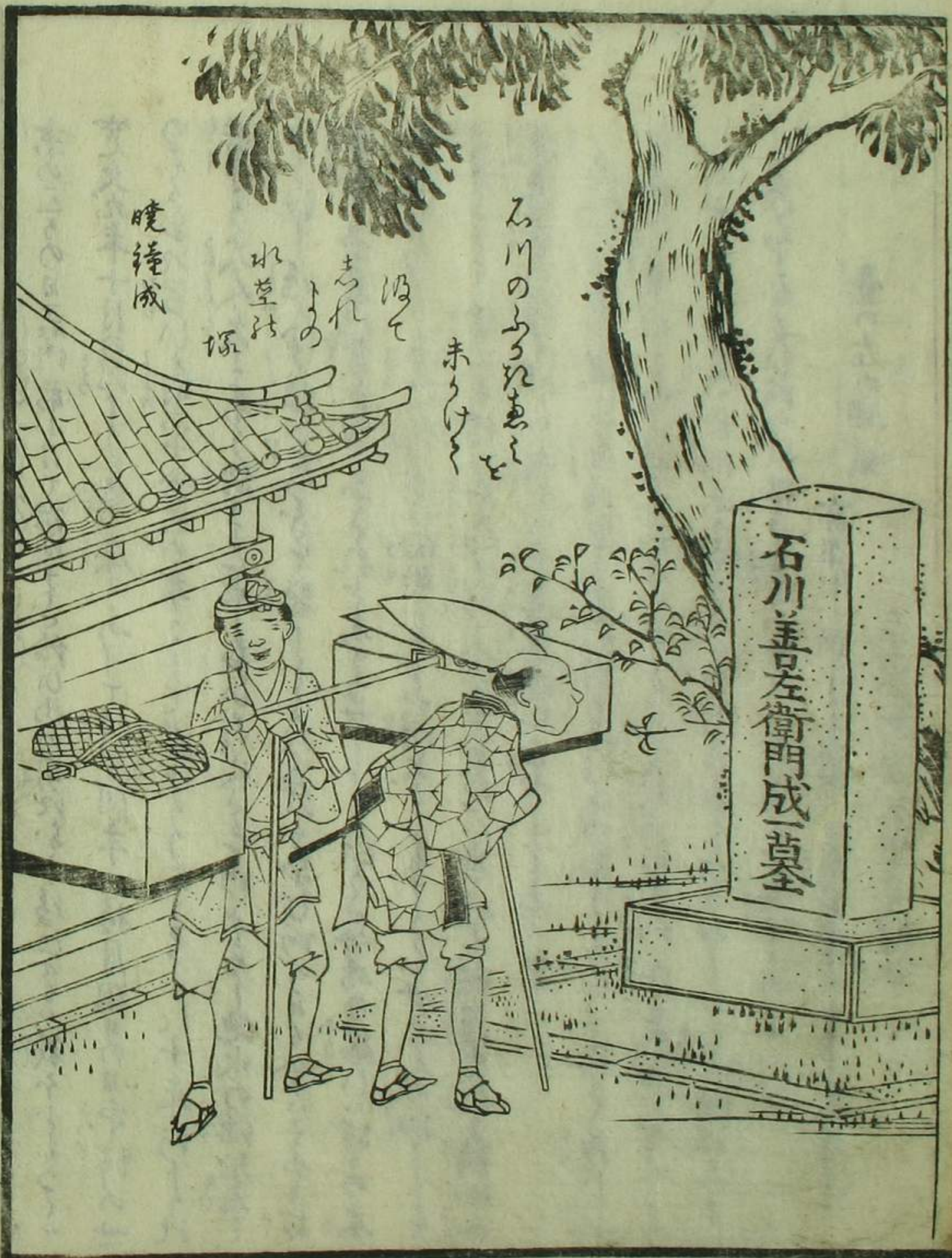
石川氏佐治度の後寺にて兼座
寛文の年間懸史亦所せり當国見鳴
郡に來りて教五穀豊饒の方策をわ
らへ上忠勤をこころ下小仁惠を施
萬代水旱の愁いと脚くそ一依て其
高恩の有ぐれと後世亦傳尚志
却せざらんが爲郡中より百二十年
の後文任二年其の
石を鑿て此山上
建る所ありとの
後たなわおちる人
むかへて廿事詳た宮



金一ノ四十三

石碑銘曰

ゆるゆり吉備の下の早振神代三柱の御神八の例とて人給ひり其の
志のいれれと世も世も其の豊なり新玉の年毎に森早に田畠とてそりい
りる今より百余年余の昔も昔も穀実の鳴人最号わたり不兼應二年四
月より苗さす早ついで七月中此の日のあつて俄に空かた曇雨とてうに
降足曳の山より水四方よりづきて補たの流と流し玉降の道と崩し水
おちほり人ささるる斯く昔の君ささるる大人と八月翌の日に此鳥一
下へ給ひ医師とて治むして飢人の養ひを其の夜とあり水一たつて民を助け
給ひり鳴人も志げれ御惠と筑波山の氣とそりあさるるからて園守
で志りてと申る行も其の年も春めて玉くしめ其の作と兼ては月中
の七の月同所小末とて荒る田畠崩さる道とてはくらする此時雨に
池より早のぬいを除むとてらけ青人草浅かり出てあり金の土とて
ゆるくせ角障経巖とてきくくをあるは横ありあせる山とてあつては後
に村林村の上る池とて作らるる梅林湖と号く夫より末見村の上ある森池
田村柳田村中川村より得柳池下村小曲池田村とて集池長尾村小天王池とて



金一ノ四十五

小川橋本味野赤崎

下村より下津井へさる間の溪より遠くあり

釜島城趾

下津井の東久須美の端のむら沖あり

天慶二年前伊豫掾純友残黨とあつち此地小城廓と稱し楯籠る播磨分島
 田惟幹備前分高兩勢都合三千余騎して攻寄るしつても賊徒大勢して敵
 かゝく大敗故に播磨備前兩國はつても更さる安藝周防も南海四國の勢皆
 純友が手小属其勢強大いりしごと
 同二年純友退治のちた清門依藤原倫實と大將して五畿内の執事千余騎伊
 淡路の勢千五百余騎と西國小差向る官軍救攻戦せしつても城兵つて勝
 利し得ば終に官軍討負て後彼の關引退つても其後純友は九國二島一感しよ
 るい勢い盛んらばつても天慶四年六月終に官軍のちた滅亡せらる

前太平記卷第七

去程小純友が討手して山陽道向らまゝに清門依倫實は千余騎を
 引率し二月十二日に都と立て二百余艘の兵船と込同十九日の辰に討に



扇ヶ崎
 下津井の後の
 山多し古人居
 タワトワ
 新庄八幡宮
 阿津村の山に
 赤崎の跡あり
 の生玉神とい
 本庄八幡宮
 下津井より
 一里西より

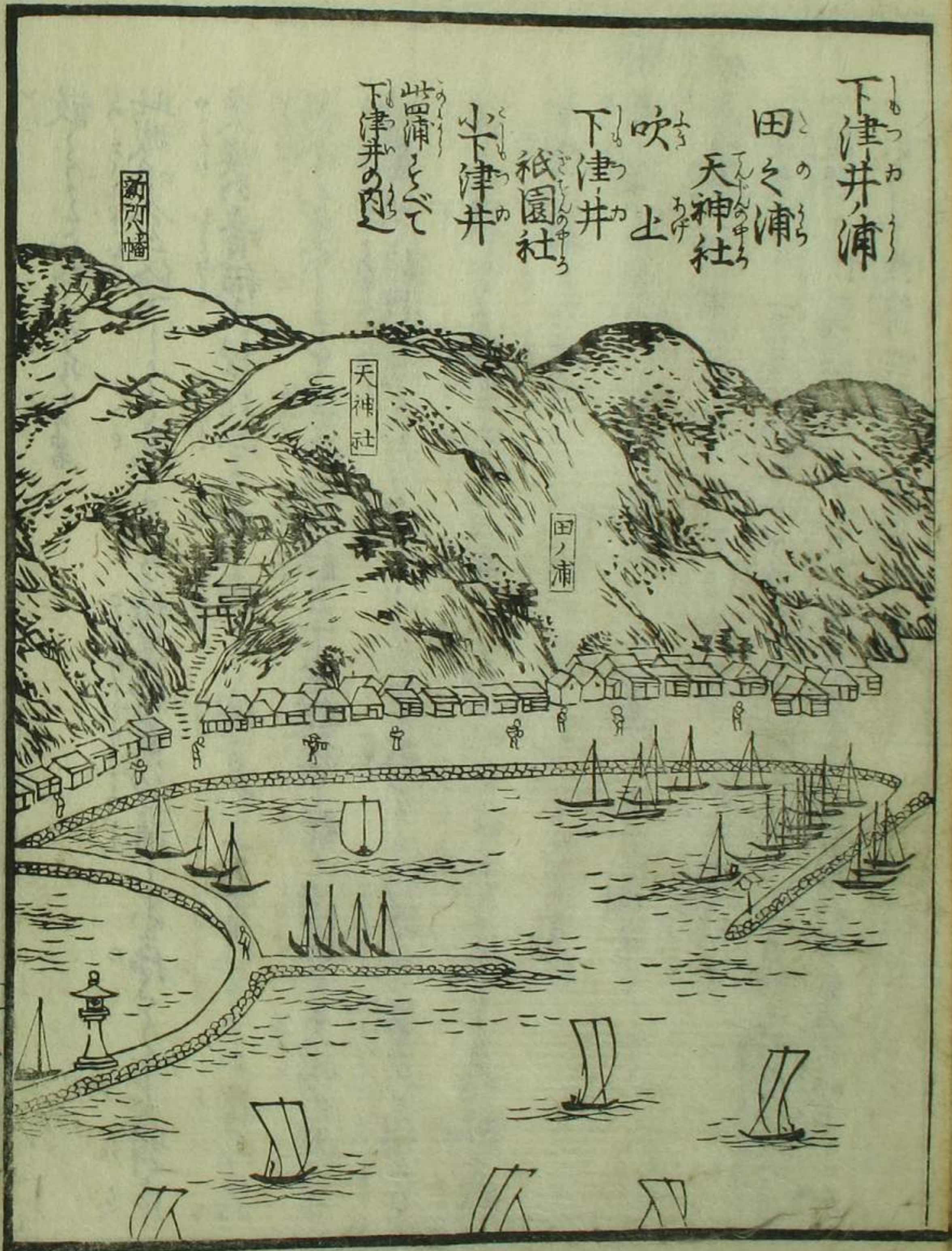
扇ヶ崎

天神社

御旗所

吹上

下津井



下津井浦
 田之浦
 天神社
 吹上
 下津井
 紙園社
 半津井
 世帯とて
 下津井の跡

扇ヶ崎

天神社

田之浦

金一ノ四十七

釜鳴合戦

天慶年間
伊豫権平
平家朝臣の海
嶺より勢
強大なり
久富重光
是を攻め
終つて
とせし
通し又屯
権亮純素
兵船二十余
艘を以て



金一ノ四十九

漕せ
是を援け
小官軍勝利
後州に敗
此は通
の海より



名産鱒

下津井の浦こそまき漁は鱒諸所より出るも此より出るの味は美なりとぞ

大島

下津井の西浦呼松村のむらしの沖より

夫木集

大島やちの塩あいに舟の棹よりぬる魚もとる哉 惠慶

大島洋

前中同ト

真那辺

下津井の西南小湾

山菜 ともかくも島より来るもの下りてやりこの物の物ともあひて
ま那辺より塩飽かきあゆむといふと波もなり 西行

塩飽七島

下津井の向ふ左右の澳小湾

本嶋

塩飽第一の本島より泊浦宮ノ濱新家甲生並島浦屋釜大浦福田浦尻濱

向笠嶋 荻小嶋 辨天島 長島 馬が小嶋

廣島

本島の西より江浦立石浦青木ノ浦市井浦茂浦廻り九三里余より

たて湯まの浦里はまきり

と乃業とする心女とぞ

も男小とていひて船のう

ていふ小とていひて船のう

魚どもとていひて船のう

のていひて船のう

懐かたて市とていひて

ゆらやとていひて

異きもの列りて

つともいひて

要とていひて

合し起臥とていひて

あかやうとていひて

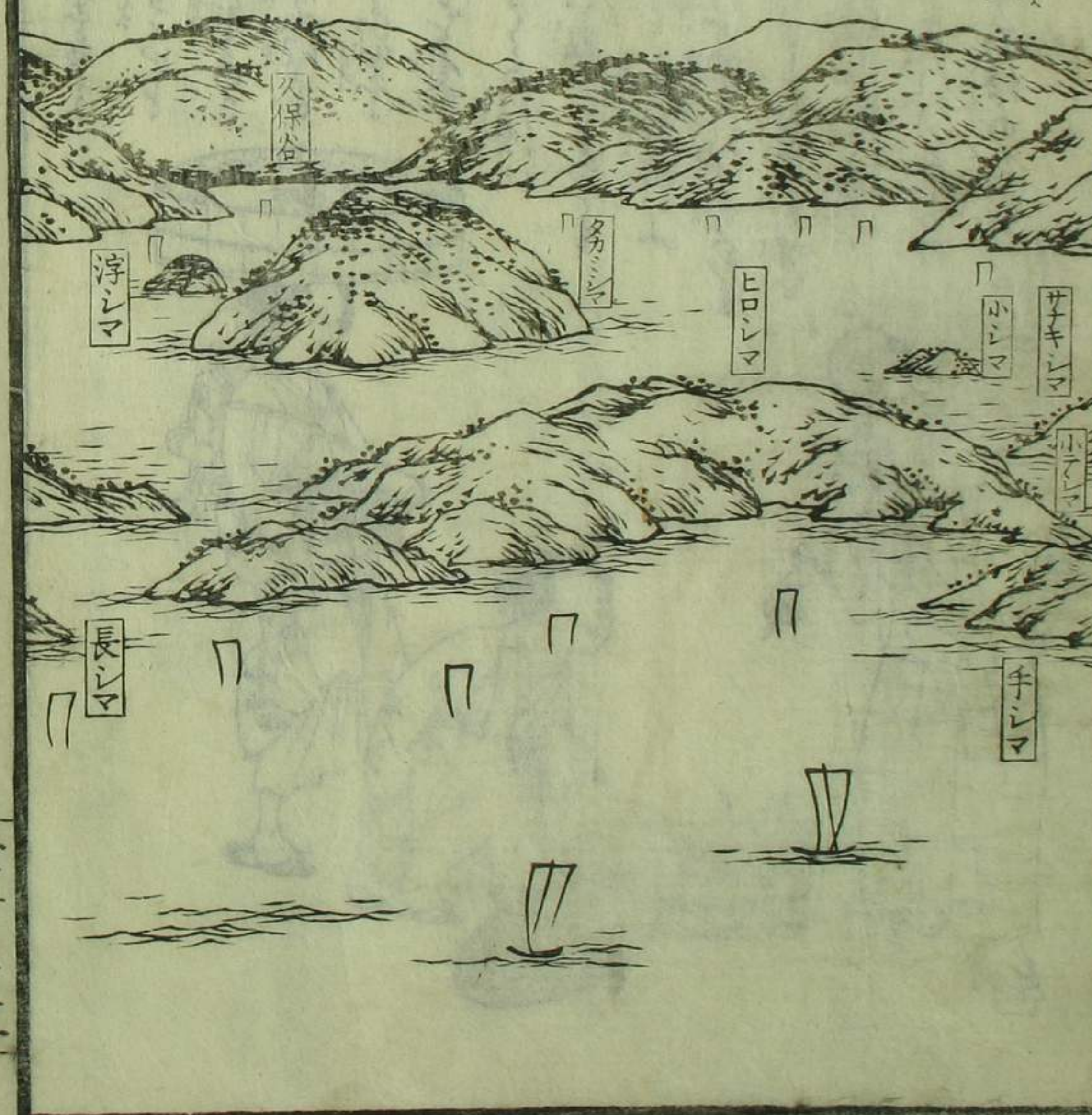
ふとちのいやうとていひて



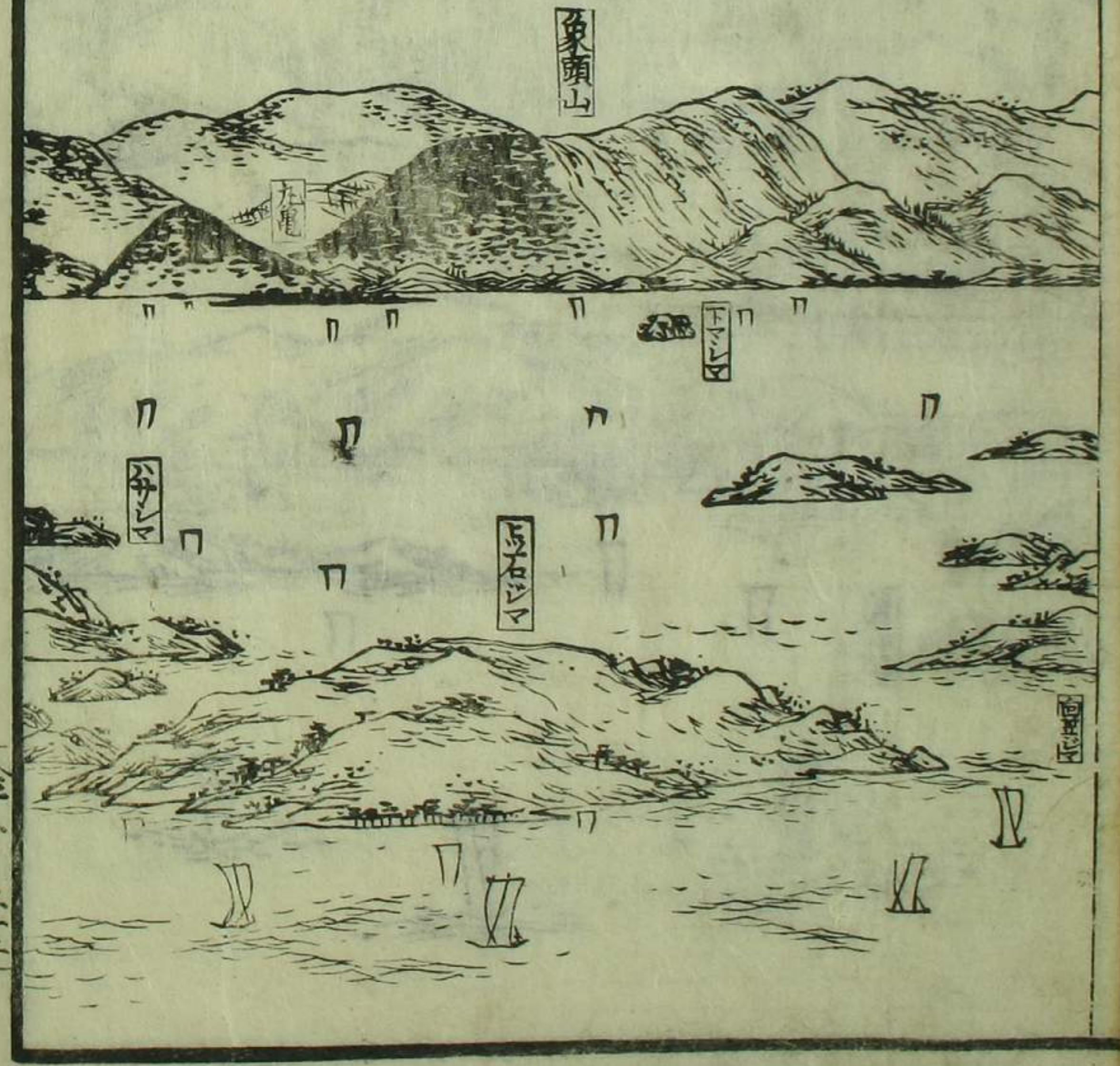
小瀬石 凡十九向
 與高 凡廿一
 小與 凡廿六
 岩 凡廿八
 空菜 凡九
 櫛石 凡廿
 長石 凡十六
 柳依 凡廿
 向 凡廿八
 半高の海 凡廿
 形 凡廿
 中 凡廿
 少 凡廿



下津井浦 後山
 扇崎より南海
 肥後之國
 塩飽嶋之大概
 廣島 高尾真向
 中嶋 凡廿八
 高尾 凡廿八
 佐柳 凡廿八
 牛嶋 凡廿八
 小嶋 凡廿八
 小嶋 凡廿八
 小嶋 凡廿八
 小嶋 凡廿八
 小嶋 凡廿八

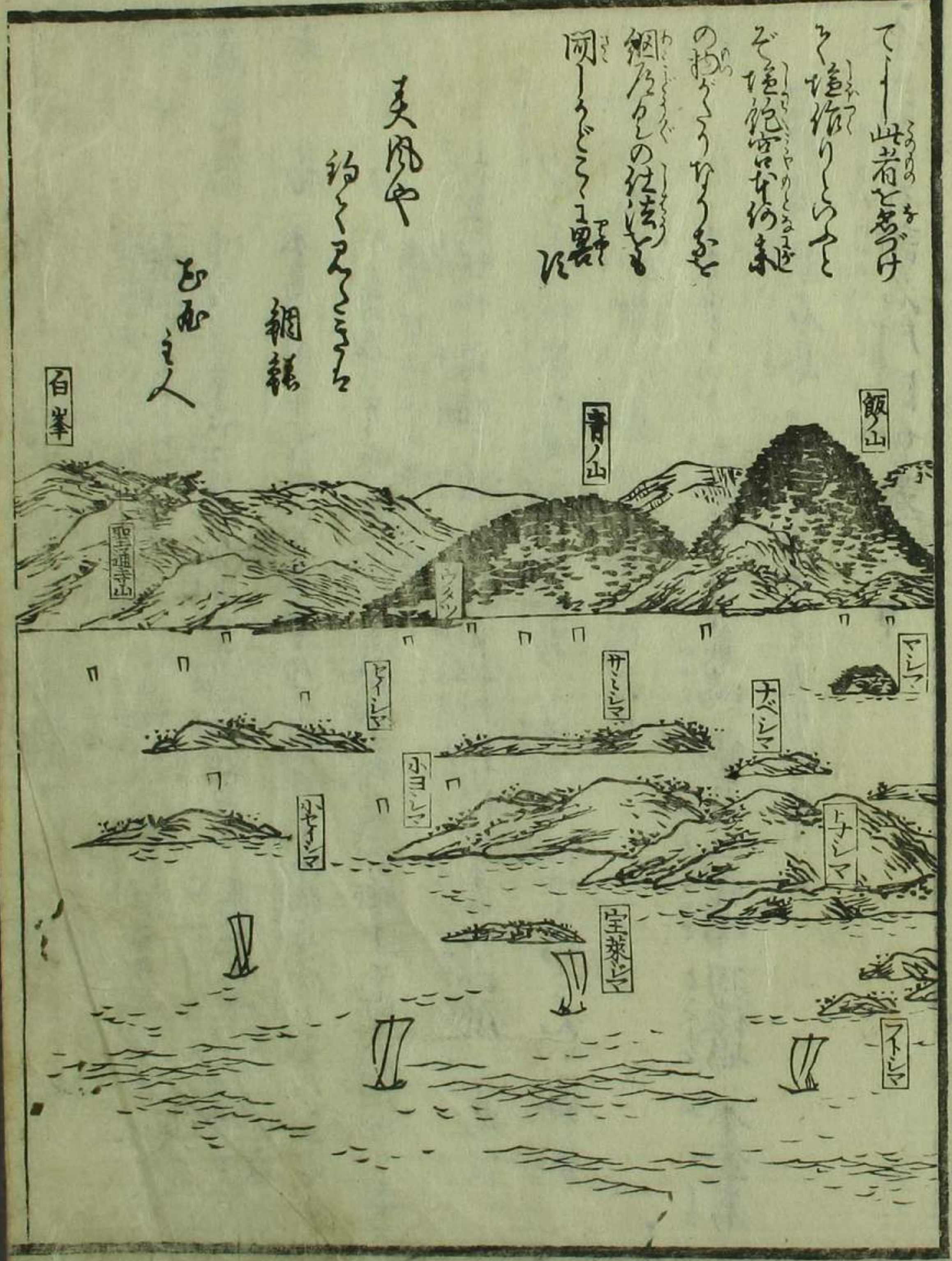


けしん 大い破換す
 水波の結成りつ
 にもあまりて子
 標しとまらざる
 候春くく魚をば
 半増河海魚の毛
 こと編結し多々注
 けしん 新清色を
 けしん けしんあり
 朝烟とてと波の
 考くくく注し注
 のきくわくく候
 先し考くくくを
 やくしと注し注
 ぐいて注し注



五石山

てー 此者とあつ
 ぐ注し注しと
 ぐ注し注しと
 のわくくくくを
 網及くしの注し
 同しとくくく



美風也
 約くくくくく

百峯

正水

網結

半嶋

廢嶋の西 小半嶋 山のてつて人お田畠あり

依柳嶋

廣島の坤あり其間凡一里余 小島 下二面島 依柳嶋の南あり

高見島

廣島の正南あり凡一里島の田凡一里余 高見島の東あり

牛島

本島の南三十丁計あり島田凡三十間計云 沙彌島 渡る支凡三十町

沙彌島

牛島の南の方あり 狭峯も云 理源大師誕生の地云 尚其間計あり

狭峯嶋

或云 狭峯嶋や真嶋と通ふ海士小船行帆あり 青の山 鳥家

夫木葉

夕ぐれ 狭峯の嶋 鳴千鳥あり 磯道水波やうん 頭盛

瀬長嶋

小瀬長島 沙彌島の良あり

與島

本島の東あり 小與嶋 突萊嶋 鍋嶋 二面嶋 羽佐嶋 不登嶋

岩黒島

長島の東ありて其間凡二十丁云

金毘羅齋請名所圖會卷之一畢

